

## 「御伽噺に良くある

### 結末」

2009/08/18

死んでやろうか、一緒に。  
夢で君はそう言った。

「死んで、ここから逃げましょう」

いつしよに。

冗談なんか言わない私のかわいい秘書が、真面目な顔をしてそう言った。

秘書は両手を机について、のぞき込むようにして私を見た。私は椅子に座ったまま、近づけられた秘書の顔、その表情を観察した。

じつとその瞳を見つめ返しても揺らがない決意に、ここま  
でなのかとすべてをあきらめる準備をする。

迷いは一瞬だけだ。瞬きの間に必要な処理を全て終えた。  
後は実行するだけだった。

右手を伸ばす、次いで左手も。

秘書の頬を両手で包み込んで、薄い唇に唇を寄せた。

冷たかった。そうして柔らかい。

瞳られる目をじつと見つめて、逸らさせない。

弱くなつた唇の合わせから舌を差し入れて、優しくして幸せ  
な、まるで恋心のような口付けをした。

最中に立ち上がり、角度を変えて何度も何度も繰り返す。

いつの間にか秘書は目を閉じていて、私には何かを祈って  
いるように見える。

死んでやろうか、一緒に。

夢で君がそう言った。だから私はうれしいと思った。  
だってこれは夢だから。

何でも出来る。何だって叶う。

彼岸の花畑で一緒に、手に手を取って駆け落ちよう。

君は泣きたいような顔で笑って頷く。

その先の展開までは既に覚えていない。

思い描いた空想は悲しいくらいに軽やかで、私の掌まで落ちてはこない。

触れられないうちが花なのだ。  
奇麗なものはいつだって、遠くにある。

その均衡を君が壊すというならば、私はいつでも君を壊すよ。

「そう、教えたはずなのにね」

「なんの、話……………」

「君が忘れてしまった、或いは忘れたかったのかな？ ただの君と私との約束の話だったんだよ」

御伽話には良くあること。

守られないから悲劇が生まれる。

「私を好きになつちやいけないよって」

「ふっ……………んん、」

「ちゃんと教えたはずなのに、ね……………」

口付けの合間に呟いて、何か言いたげな唇をまた塞ぐ。

言い訳なら聞きたくないし、もっと言うなら全てがこの際無意味なのだ。

これはもう、終わってしまった物語。

一直線にひかれた道をただ転がり落ちるだけの結末。

全ての処理はもう、私の中で終わっている。

「死ぬことが許されるのは君だけだ」

唇を真つ直ぐ耳元まで滑らせた。

軽くくわえて舐め上げる耳たぶ、熱さに微笑みが漏れる。  
そこに言葉を、毒でも流し込むように囁いた。

机を挟んでいるから遠い秘書との距離がもどかしい。

私は片方ずつ膝をついて机に乗り上げた。

そのまま這うようにして机の端、秘書の目の前まで迫る。  
腰を浮かした姿勢で、片腕を秘書の背中に回し、もう片手で後頭を引き寄せて髪を乱した。

突然貪るような、先程よりも深い口付けをあげる。  
頬の内側の柔いところ、口蓋の裏側、舌の根本。腔内を余すところなく蹂躪しては呼吸を奪う。

息苦しさと秘書は首を振る。その動きすら押さえ込んで髪をなでる。舌先の激しさとは対照に指先は優しい。

指先のもどかしい感覚とは対照に、舌先は甘い快樂に酔っている。

君の中を泳ぐ、これが最後だと思つて反面、渴くような離れ

がたさを感じた。

額を合わせたままにして、息継ぎの要領で未練を断ち切る。二人の間に掛かった糸もふつりと切れた。

口の端からは透明に、飲み込めなかったものが垂れた。親指で拭って、それを舐めた。

間近すぎて焦点の合わない君の顔が赤くて視線が逸らされる。

「ばいばい」

片腕を背中に回し、片手で後頭を抱き寄せて。

一度だけぎゅうと力を込めて抱きしめて、それからもう迷わないように一気に首筋に歯を立てた。

「うあ……っ、は、ああっ、」

じゅりじゅりと、音を立てて甘く苦い液体をすすり上げた。

あまい、あまあい。

気がどうにかしてしまいそうなほど君は美味しい。

耳元の君の口から泣いてるような声がする。

腕の中で時折はいれんする体を愛おしくかき抱いて、気持

ちいいの、と私は嘲笑った。

君の体から力が抜ける。抱いているのがつらくなる。

ねえ気持ちいいんでしようど私は君を飲み干しながら、胸の内でも何度も問いかける。

死ぬのは気持ちいいでしょうと。

そしてなんてうらやましいんだとも。

がくりと君が膝から崩れ落ちる。

とうとう支えきれなくて君が腕の中から滑り落ちる。

「あーあ」

残されたのは、倒れた君と、机の上から残念そうに君を見下ろす一匹の化け物。

死にたい。

死ねない。

わかってたはずだ。

死にたい。

死ねない。

いつしよに死のうという言葉は聞き捨てならない。

死ねないと言っているのがわからないのか。  
私の世話が嫌なら素直にそういえばいいのだ。  
そんな嫌がらせのようなことを言わなくても  
ほら、すぐにだつて暇を出してあげる。  
ほうら、こんな風に、さ。

最後に残されたのは熱を失つて動かない固まりと、唇を紅  
で彩つてわらう陰気な化け物。  
また新しい子探さなきゃなあと思つて、ひらりと机から飛  
び降りた。

## 「妖し恋し」

2010/02/07

好きですと言ったらありがとうと返された。

そこで一度会話が途切れてしまい、緊張でどうにかなってしまいそうな気持ちではその沈黙に耐えることもできずに、それだけですか、とさらに言い募ってしまった。

不思議そうな視線にさらされてもう本当に、どうにかなってしまいそうだった。

だから、それだけって？ と、かわいらしく小首を傾げるときかれたときに、例えば僕はあなたを見ると、手を繋ぎたいとかキスしたいとか、抱きしめたいとか、触りたいとか、そういうことを思うんですけどあなたはどうですか、と。

それこそそれはどうなのだと、思い返せば頭を抱えて叫びだしたくなるようなことを口走ってしまった。

僕は真つ赤な顔をしていただろう。だって顔だけじゃなくて体中、地獄の業火にでも灼かれるみたいに熱かったから。

さらしにしばらくの間あなたはじっと僕を見つめて、それか

らああ、と不意に呟いて手をうった。

「つまり君は、私に恋人になってほしいってことなんだ」

つまりの一言で要約しないで欲しかった。

間違いいではないしこれ以上なく的確だったけれども、正しい表現の分なおさらいしたまれない。

なんでこんなやつを好きになってしまったんだろうかとか、いやこんなやつだから好きになったんだとか、ぐるぐる、ぐるぐる、頭がどうにかしてしまいそうまで目が回るみたいな心地であなたの前に立っていた。

ふわり、と幸せそうにあなたが笑って、僕の思考は停止する。

「ありがとう、うれしいよ」

ふわり、とさみしそうにあなたが笑って、僕は思考だけでなく魂の拍動までも、止まってしまいそうな心地を味わった。

「でもね、それは出来ない」

だって、とそこから語られた話を僕は死んでも忘れないと思う。

そんな、きつとあなたが聞いたら笑ってしまいそうなことを考えていた。

「だったら——」

とにかく笑ってしまいうくらい僕は必死だった。  
あなたがほしくて、必死だった。

差し出された選択肢は用意される前から既に僕がどう答えるのが決められていたようなもので、そういう意味ではもう、それは選択肢なんていうやさしいものではなかった。

それでも、差し出されたそれが例え運命だとしても、どんなものでも、あなたがくれるものなら全て欲しかった。

ふと意識が浮上する。視界を埋め尽くす黒色の中では今がいつかなんてわからない。

手探りで辿るシーツの感触がどこまでも続いてとなりに誰もいないことに気付いて、僕は悲鳴を飲み込んだ。

嫌な考えばかりが頭を巡り、僕は簡単に泣きそうになる。

いつからこんなに弱くなってしまったのだろうと、僕は顔を両手で覆い、胸の奥に積もった想いの丈が、澱んだため息に滲んむのをもう堪えることなんかできなかった。

「どうしたの」

空気が動いた。敏感に肌で感じて、次いで低めの体温に包まれる。

肩を抱く腕を必死でつかんで、頬をすりつけて、深くにおいを吸い込む。

愛しい人を嗅ぎ取ってもう、それだけで崩れ落ちそうなほどの安堵に嗚咽が喉をたたいた。

「かわいそうなこ」

笑う声が耳朶からするりと入り込み、深い悲しみに満たされる。

今あなたはどんな顔をしているのだろうか、振り返ろうとして、止めた。

どうせ見ることのできないものだぞと知っていたから、僕はただ、後ろから抱きしめてくれる両腕に必死にすがりついた。

他人を好きになるのは怖いこと。それは己を弱くさせる。君の想いに応えるのは怖いこと。いつ見放されるのか、その可能性に私は耐えられない。ごめんねという言葉を遮った。

「だったら」

なんだっていい。なんだってする。

「僕から全てを奪ってください」

あなたがほしい。

それ以外はなんでもいい、から。

「僕があなたから逃げ出せないように」

とつさにあなたの手をつかんでいたことによく気付いた。あなたがうつむいて、指の間に指が滑り込む。

甘い感触に僕は舞い上がっていた。

「じゃあ」

ぴつたりとあわせて指を絡めて握りこまれた手のひらがま

るで僕のものではないみたいだ。あなたの体温が伝わる部分だけがふわふわと浮かれていて僕のものではないみたいだ。

つないだ手を胸の高さまで上げて、もう片方の手もそこに添えて、あなたは、祈るみたいに僕の手を包み込んで囁いた。

「君の世界の全てを、わたしに頂戴……………?」

僕が領いたのが先か、あなたが指先に口付けたのが先か、わからない。

とろけそうに幸福な笑みを浮かべて、僕はあなたにかき抱かれた。

「ありがとう」

粘膜同士をすり合わせることが接吻なのだとしたら、これは確かにそれなのだと思うた。

髪の間指が差し込まれて、頭を抱かれる。

あなたが僕の眼球に舌を伸ばして、舐めて、痺れたようなそこに静かに歯が立てられた。

ふつりと硬い歯が刺さる音をきいた。しめった中身をかき回す音をきいた。高く鈍い神経の千切れる音をきいた。頬をぬらして何がしたりこぼれる音をきいた。

火のついたように熱くなるそこにしかし痛みはない。

むしろ快楽さを感じて僕は、あなたに支えられていなければ、膝から崩れ落ちてしまいうさだった。

半分のぼけた世界であなだが笑う。

無邪気に笑うその顔が再び近付いてきて、これで僕は、あなたのものになることができるのだと、そう信じて疑わなかった。

最後に唇に吹き込まれた口付けは、鉄鏝と涙の辛い味がした。

頬をべったりと汚す感触が何色なのかをもう、僕が見ることはない。

二度と。

「かわいいそうなこはだいすきだよ」

うっとり歌うような囁きに意識が引き戻される。

だったらそれで構わないと泣きたい気持ちで思つて、頬を透明な悲しみがぬらしていく。

僕はとうに気付いていたけれども、すがり付いた腕の感触を幸福だと信じ込み、涙を流す。

僕はあなたがほしかったけれど、本当はきつと、僕の両腕は空っぽのままだ。

あなたは抱きしめさせてくれない。いつでも抱きしめてく

れるだけ。

きつと僕はあなたに手に入れられてしまつて、今だって何一つ与えてもらつていないのだと、本当はどうに気付いていたのだけれど、あなたが大好きだといつてくれるなら、それで構わないのだと信じ込む。

あなたは僕の名前を呼ばない。

でも僕はその事案に見えないふりをする。

きつと、ずっと。

これからも。